

近世日本の民事裁判記録

— 松江藩郡奉行所文書の調査から —

額定其勞

はじめに

小論は、松江藩郡奉行所文書の調査報告に当たるものである。「松江藩郡奉行所文書」という名前自体は現代の文書調査整理者たちによってつくられたものであるが、同名称が指すのは江戸時代後期の松江藩郡奉行所で受領・作成されて今日に伝わった民事裁判記録文書群のことである。筆者は先行研究および原物確認などを通して同文書に対する調査を行ってきたのであり、本稿ではこれまでの調査の結果を紹介することにする。

松江藩郡奉行所文書の概要

松江藩郡奉行所文書は現在島根県立図書館に所蔵されている。全部で129件の案件が含まれており、それらは1750年から1872年までの年代をカバーする。一つの案件には複数の文書(十通から百通以上)が関係しており、「一案件は一袋に」という形で保管されていた。それゆえ「一件袋」とも呼ばれ、冊子体の文書から区別されていたようである。全体を通してみると様々な類の案件があり、その種類と内訳を示すと表1のようになる。

表1に関連しては次の二点の説明を加えた

以下、はじめに先行研究に基づいて松江藩郡奉行所文書について概観し、次に筆者が自ら調査した同文書の中の一例(文書 No. 200)を紹介する。最後に同文書の学術的な価値を確認した上で、同文書に関する今後の研究課題を提示したい。なお、紙幅の都合により本文では例外を除いて典拠は示さないこととする。松江藩郡奉行所文書に関する先行研究については文末の参考文献一覧を参照されたい。また、本稿で提示する写真は筆者の撮影によるものである。

い。第一に、山論と海山境・村境、漁場・漁業を巡る案件は併せて62件(全体の50パーセント弱)である。これらの案件は主に自然資源を巡って争ったものと推定され、当時の村人口の増加や農業状況の変化がその原因であった可能性がある。第二に、およそ半分の案件が1841年と1867年の間に発生しており、この数字は江戸時代後期の松江藩の社会経済的な変動を反映しているように見受けられる。

ところで、なぜこれらの民事裁判記録のみが残されたのかについては未詳である。偶然に

時々の「難」を免れたという推測もあるが、係争の再発防止に備えて意図的に残された可能性もある。また、1750年から1872年までの123年の間に計129件の案件があったことからすれば、およそ一年に一件の民事案件があったことに近い。郡奉行が一年あたりに処理した民事案

件数がこれほど少ないことには理由があるように筆者には思える。即ち、恐らくは多くの民事紛争は村や郡屋のレベルで処理され、残りのごく一部の処理が困難な民事紛争のみが郡奉行による処理にかけられたと推測できるからである。

表1 松江藩郡奉行所文書における民事案件の種類と内訳

(単位=件)

事件種別 \ 年代	- 1750	1751- 1780	1781- 1810	1811- 1840	1841- 1867	1868- 1872	合計
山論	2	3	10	9	11	2	37
海山境・村境	1	1	6	3	3		14
漁場・漁業				2	5	4	11
商業				1	4	2	7
金銭				3	5	3	11
田地・家屋敷					4	3	7
相続・家					6	1	7
寺社		1		3	9	1	14
難破船					9		9
その他			1	1	9	1	12
計	3	5	17	22	65	17	129

出典：島根県立図書館（2001）[上巻]、「解題」10頁の表を抜粋・編集して作成。

松江藩郡奉行所文書の一例（文書 No. 200）

松江藩郡奉行所文書 No. 200 は「二股大敷網漁場争論」を巡る裁判記録である。二股大敷網の設置場所にまつわるこの紛争は1839年に始まり、係争者双方の間の合意によって1848年に落着となったという。案件袋の表側には「嘉永元年申六月二日落着／但天保十亥年〆／杵築江御免之二股網場／之義^二付日御碕^五年来／差鏈居候処此度両所和順致し／願下願出取引一途／神門／飯石／両郡々奉行／市川虎市」、裏側には「杵築／日御碕／三番櫃入」とそれぞれ筆で書かれており、当該案件の概要と保管場所が示されている（／記号は筆者による。写真1も合

わせて参照）。

文書 No. 200 の袋は縦34cmと横22cmのサイズになっている。松江藩郡奉行所文書の袋は案件ごとにその大きさが異なるが、No. 200の袋は大きい方に数えられる。No. 200の袋には合計129通の文書が包まれており、それらは次のような形で保管されている。つまり、まず129通の文書が二つの大きめの束に分けられ、その中の一つの束が表裏に文字が書かれた一つの小さめの内袋に入れられている。この大き目の二つの束にはそれぞれ12個と15個の文書束が含まれ、その一つ一つがさらに幾つもの文書

のまとまり、あるいは単独文書を包含する（詳細は鳥根県立図書館（2001）〔上巻〕、174～179頁を参照。また写真2も合わせて参照）。

このような保存形態によれば、一件袋の中の諸文書は何かの基準に沿って段階的に分類されて保管されていたことが分かる。一方、文書の種類と点数の側面から言えば、訴状やそれに対

する被告の返答文、往復書簡やその控えなどが大多数を占めている。文書 No. 200 に対する調査からも明らかになったように、各文書の記述は総じて言えばかなり詳細である。松江藩郡奉行所文書のこのような書写特徴は、同文書の作成目的が主に証拠固めと蒸し返し防止にあったことを示唆しよう。

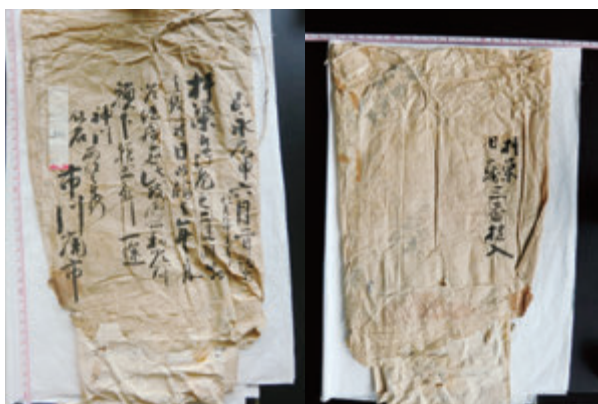


写真1：文書 No. 200 の袋の表側（左）と裏側（右）



写真2：文書 No. 200 の一部（内袋中の6つのまとまり）

おわりに

以上で述べてきたことから、松江藩郡奉行

所文書は体系的に分類されて保存されていたと

いう印象を受ける。案件の総数（129 件）は決して多いとは言えないものの（長崎刑事裁判記録は 8,200 件以上の案件を含む）、個々の案件の保存形態は江戸時代の民事裁判記録に使用されていた「一件袋」の形をよく残していると言われている。現代に伝わっている江戸時代の民事裁判記録群はほかにもいくつか知られているが、その中には松江藩郡奉行所文書のような保存形態を採ったものは見当たらない。松江藩郡奉行所文書の書式や保存の仕方という形式的な特徴は当時の松江藩の文書行政や司法実務の一側面を反映するものであろう。

松江藩郡奉行所文書における個別案件の内容からは江戸時代の日本社会における民事紛争とその処理の実態を窺うことができる。特に、一つの案件には複数の詳細な記述を有する文書が含まれているため、その案件の実態を隅々まで調べることが可能であるようにみられる。今後の課題としては、松江藩郡奉行所文書をその他の江戸時代から残った民事裁判文書や、さらには同時代のアジア諸国の地方レベルの民事判決文書と比較することが挙げられる。さらに、同文書に対する法学の視点からの分析も今後行うつもりである。

参考文献

- 安藤正人『江戸時代の漁場争い 松江藩郡奉行所文書から』（京都：臨川書店、1999 年）。
- 「松江藩郡奉行所「民事訴訟文書」の史料学的研究」、高木俊輔・渡辺浩一（編著）『日本近世史科学研究——史料空間論への旅立ち』（札幌：北海道大学図書刊行会、2000 年、111 ～ 157 頁）。
- 橋本誠一「明治初年の聴訟事務——松江藩郡奉行所文書を手がかりに」『法制史研究』61（2011 年）、1 ～ 50 頁。
- 人間文化研究機構国文学研究資料館（編）『近世の裁判記録』史料叢書 9（東京：名著出版、2007 年）。
- 島根県立図書館『島根県立図書館所蔵松江藩郡奉行所文書調査目録』[上巻・下巻]（松江：島根県立図書館、2001 年・2002 年）。
- Chuluu, Khohchahar E., "Comparing Legal Cultures: Civil Case Settlements in Local Courts in Early Modern Mongolia, Japan, and China," *Journal of Korean Legal History* 56 (2017): 123-50.

額定其勞（エルデンチロ, Khohchahar E. Chuluu）

【所属・職名】東京大学大学院情報学環准教授・（兼）東洋文化研究所准教授
【専門領域】比較アジア法制史／モンゴル法制史／帝国と正義／法と狩猟・宗教・ジェンダー
【最近の論文】

①「役所と「地方」の間——清代モンゴルのオトグ旗における社会構造と裁判実態——」『法制史研究』67: 41 ～ 97 頁、2018 年 3 月。

② "The Encircling Hunt of Mongolia: Institutional Structures and Socio-Political Implications," *Tōyō bunka kenkyūjo kiyō* 172: 25-58, December 2017.

【所属学会】日本法制史学会、米国アジア学会